



JAPAN HERITAGE
日本遺産

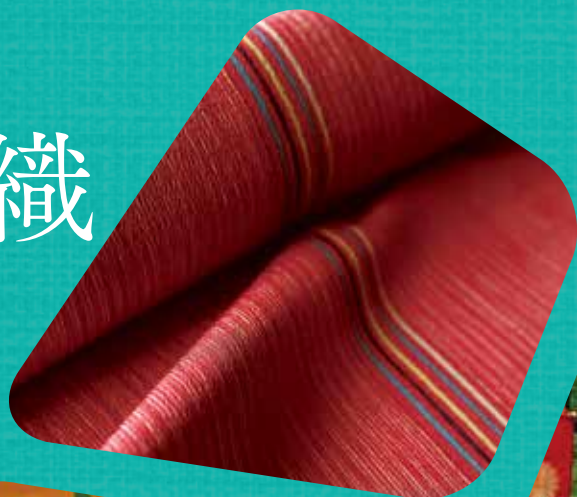
日本遺産フェスティバル in 桑都・八王子

日本遺産分科会 2023

2023年11月5日(日) 12:30~16:00

会場:東京たま未来メッセ3階会議室

染織



食



山岳信仰
・修験



日本遺産のストーリーを活かした地域づくりや魅力発信を、
ストーリーの垣根を越えてテーマごとにシンポジウムを開催

12:30~13:50	第1分科会「染織の文化」—染物 織物の技と美—
13:00~14:20	第2分科会「山岳信仰・修験の文化」—信仰の文化がつなぐ人・地域—
14:00~15:20	第3分科会「食文化」を活かした地域活性化に向けて
15:30~16:00	総括討論 (コーディネーター 丁野 朗氏)

日本遺産分科会 2023 の 開催にあたって



1. 日本遺産について

地域の歴史的の魅力や特色を通じて我が国の文化・伝統を語るストーリーを「日本遺産 (Japan Heritage)」として文化庁が認定するものです。ストーリーを語る上で欠かせない魅力ある有形や無形の様々な文化財群を、地域が主体となって総合的に整備・活用し、国内だけでなく海外へも戦略的に発信していくことにより、地域の活性化を図ることを目的としています。

2. 日本遺産分科会の趣旨・目的

日本遺産分科会は、日本遺産ストーリーの魅力発信や活用についての各地域の事例紹介及び意見交換を通じ、地域の魅力向上と地域間交流を図ることを目的としています。

今回の日本遺産分科会では、「染織の文化」「山岳信仰・修験の文化」「食文化」の3分野について、本フェスティバルのメインテーマである“桑都・八王子から、104の物語（ストーリー）を未来へ”に因み、各地域の未来を見据えた今後の取組や、地域連携による新たな魅力の創出など、未来志向の意見交換を行います。

【日本遺産分科会 2023】

第1分科会「染織の文化」—染物 織物の技と美—	P3
第2分科会「山岳信仰・修験の文化」—信仰の文化がつなぐ人・地域—	P8
第3分科会「食文化」を活かした地域活性化に向けて	P13
総括討論（コーディネーター 丁野 朗氏）	P18

日本遺産分科会 2023 認定ストーリー所在地

第1分科会「染織の文化」

- 002 かかあ天下 一ぐんまの絹物語ー
- 056 山寺が支えた紅花文化
- 081 藍のふるさと 阿波
ー日本中を染め上げた至高の青を訪ねてー
- 088 霊気満山 高尾山 ー人々の祈りが紡ぐ桑都物語ー

第2分科会「山岳信仰・修験の文化」

- 012 六根清浄と六感治癒の地
ー日本一危ない国宝鑑賞と世界屈指のラドン泉ー
- 020 自然と信仰が息づく『生まれかわりの旅』
ー樹齢 300 年を超える杉並木につつまれた
2,446 段の石段から始まる出羽三山ー
- 024 江戸庶民の信仰と行楽の地
ー巨大な木太刀を担いで「大山詣り」ー
- 099 「葛城修験」
ー里人とともに守り伝える修験道はじまりの地



第3分科会「食文化」

- 010 丹波篠山 デカンショ節 ー民謡に乗せて歌い継ぐふるさとの記憶ー
- 033 地藏信仰が育んだ日本最大の大山牛馬市
- 035 鎮守府 横須賀・呉・佐世保・舞鶴 ー日本近代化の躍動を体感できるまちー
- 051 森林鉄道から日本一のゆずロードへ
ーゆずが香り彩る南国土佐・中芸地域の景観と食文化ー

第1分科会 染織の文化 —染物 織物の技と美—

いにしえから私たちの暮らしの中にあつた「糸と布」。長い年月の中で、日本各地で培われてきた、織物・染物の「技」と「伝統」により、様々かつ独創的な「染織の文化」が育まれてきました。その「彩」や「布」は、様々な場面で、多くの人々を魅了し続けています。第1分科会では、4つの地域の染織の歴史・文化に触れながら、それぞれの地域で先人たちから受け継がれた大切な伝統・技術を活かす取組を紹介し、さらに「ミライ」へと紡いでいく「オモイ」を語ります。



No. 02 桐生織



No. 56 山寺



No. 81 藍屋敷



No. 88 多摩織

日本遺産のストーリーのタイトル及び参加団体

002	かかあ天下—ぐんまの絹物語—	かかあ天下ぐんまの絹物語協議会
056	山寺が支えた紅花文化	「山寺と紅花」推進協議会
081	藍のふるさと 阿波～日本中を染め上げた至高の青を訪ねて～	藍のふるさと阿波魅力発信協議会
088	霊気満山 高尾山 ～人々の祈りが紡ぐ桑都物語～	日本遺産「桑都物語」推進協議会

かかあ天下ーぐんまの絹物語ー

桐生市 産業経済部長 新井 八寿代

1. 認定ストーリーの特徴

明治の文豪、徳富(とくとみ)蘆花(ろか)が随筆で「機(はた)の音、製糸の煙、桑の海」と表現した群馬県。

古くから絹産業の盛んな上州(群馬県)では、女性が養蚕・製糸・織物で家計を支え、近代になると、製糸工女や織手としてますます活躍しました。夫(男)たちは、「おれのかかあは天下第一」と呼び、これが「かかあ天下」として上州名物になりました。

「かかあ天下ーぐんまの絹物語ー」は、家族と地域を支えてきた女性「かかあ」たちの姿を、実際にゆかりの地を訪れ、地元の方々の話を聞き、繭から生糸をひいたり、絹布を織ったりして、体感していく物語です。



後藤織物

2. 認定ストーリーを活かした活用事例

かかあ天下ぐんまの絹物語協議会では、日本遺産の普及啓発事業として、地域の人を楽しめるよう、構成文化財のある市町村でイベントを開催しています。パネル展示等による周知に加え、実際に絹産業や絹製品に触れてもらうことを目的に、会場内で繭クラフトや桐生織のコースター作りなどの体験ができるようにしています。

このことに加え、「絹産業はどのようなものか」、「地域でどのような体験ができるか」を広く発信するため、令和3年度は「製糸」、令和4年度は「織物」、令和5年度は「養蚕」と、ストーリーの3つのテーマでシルク体験紹介動画の制作に取り組んでいます。

桐生市では、令和3年2月に近隣の日本遺産認定都市である館林市、栃木県足利市と「日本遺産両毛3市連携共同宣言」を締結し、日本遺産や地域の魅力を国内外に発信し地域活性化につなげるため、3市共催イベント「日本遺産シンポジウム」を令和2年度から3年連続で開催しました。3市のストーリー紹介のほか、3市長によるパネルディスカッションでは、日本遺産による地域発展を目指し活動していくための意見交換を行い、より一層の連携強化につながっています。

令和4年度には、旅行会社によるツアー造成や誘客を促すため、都内で桐生市講座を開催し、桐生市にある日本遺産の魅力を発信しました。市内においては、産官学民一体による特別教育プログラム「未来創生塾」の塾生へ日本遺産講座を実施し、所定の内容を学んだ子どもたちを「ジュニアアンバサダー」として認定し、実践ガイドとして「こども×たんけん×はっけん MAYUでめぐる桐生」を開催するなど、将来の観光ガイド育成を目指しています。



日本遺産講座(実践ガイド)

3. 今後の展開

「かかあ天下ーぐんまの絹物語ー」の強みは、群馬県内にある世界遺産「富岡製糸場と絹産業遺産群」と同じ絹産業遺産として連携可能な環境下にあることであり、県で認定している「ぐんま絹遺産」も含めて、普及啓発や情報発信に取り組むことで、より多くの人に日本を支えた絹産業を知って体験してもらいたいと考えています。

桐生市では、令和4年3月に策定した『桐生市観光ビジョン』において、「日本遺産を活用した観光施策」を重点項目と位置付けています。令和5年2月に都内で実施した館林市と足利市との合同観光情報PR会においても、市長自らメディア関係者に対し、日本遺産をはじめとした各市の魅力を発信しました。

今後も、県や構成町村だけでなく、館林市や足利市、そして織物のまちという共通項でつながった八王子市を含め、連携強化による相乗効果を創出する取り組みを進めるとともに、桐生市の日本遺産を軸として、交流人口、関係人口の拡大を目指し、観光部門と協力・連携しながら、観光資源としても日本遺産を活用していきます。



織物記念館での機織(はたおり)体験

山寺が支えた紅花文化

山形県観光文化スポーツ部博物館・文化財活用課 主査 遠藤 光音

1. 認定ストーリーの特徴

東北の名古刹であり、山形県を代表する観光地である山寺。そして、山形県村山地域を中心とした地域で古くから栽培されていた紅花。

かつて「米の百倍、金の十倍」と謳われるほどの高級品であった山形の紅花は、紅花交易により、山形の地に莫大な富のみならず、上方文化との繋がりを示す雅な雛人形や紅花染め衣装など豊かな文化をももたらしました。この紅花交易や紅花栽培には山寺との深い関わりがあったとされています。

山形では、かつての隆盛を支えた山寺や紅花がもたらした様々な文化が今も地域に守り継がれています。



紅花

2. 認定ストーリーを活かした活用事例

「山寺と紅花」推進協議会では、平成30年度の日本遺産認定当初より、地域の方々と事業を進めてまいりました。

その一つが、山寺外国語ガイド「Yamaderans (ヤマデランズ)」です。山寺はインバウンドの需要がありながらも英語ガイドが整備されていなかったため、ガイドの選定、スクリプトの作成、ガイド研修等を経て、令和4年7月にデビューすることができました。

また、伝統文化体験事業「YAMAGATA BATONS (ヤマガタバトンス)」では、地域に伝わる「スゴイ文化」を親子で体験し、伝統文化そのものへの興味だけでなく、地域への愛着を持ってもらうための機会を創出しています。

観光振興という観点からは、体験型ツアーとして今年2月に寒中紅花染めツアー、7月に紅花摘みと染色用の材料となる紅餅(へにもち)作りのツアーを開催しました。いずれのツアーも地域の方を講師としており、地域に受け継がれている紅花のストーリーについて話を伺いながら体験することができるという点がツアーの魅力と考えています。

文化財の新たな活用としては、「KURAcinema (蔵シネマ)」と題し、地域に残る蔵において、蔵を所有していた紅花商人や紅花農家、紅花の研究、当時の蔵での暮らし等について話を伺いながら、紅花栽培のドキュメンタリー映画を上映しました。映画上映後は地域の保存会の方々に蔵を案内していただき、文化財のより深い理解に繋げることができました。



Yamaderans (ヤマデランズ)

3. 今後の展開

当県の「山形県文化財保存活用大綱」の中で、文化財の活用については、テーマやストーリーのもと、その所有者に加え、地域住民、行政等の関係者が連携しながら取組みを進めることで、文化財の正しい価値の理解や文化財継承の担い手としての意識の醸成に繋がるとしています。更に大綱の中では、誘客の拡大や収益の増加等による地域経済の活性化の成果が文化財の保存や継承に還元される「文化財の保存と活用の好循環」の創出を目指しているところです。

構成文化財である様々な紅花文化には、紅花摘みや紅花染めなど紅花に直接触れるものだけでなく、紅花を出荷する際に包んでいた「深山和紙(みやまわし)」や紅花商人たちの屋敷であった数々の蔵等、紅花交易が関わっていたとされる文化財も多く含まれています。今後は、文化財の所有者、文化財の所在する地域の住民及び行政が連携し、これらの紅花文化やストーリーを活用した体験型ツアー等を充実させ、観光振興、更には文化財の保存へ繋げていきたいと考えます。

また、他の日本遺産と連携した商品造成、情報発信等を通して、それぞれのストーリーや構成文化財の魅力を発信していきます。



紅の蔵

藍のふるさと阿波

～日本中を染め上げた至高の青を訪ねて～

藍住町教育委員会社会教育課 主幹 重見 高博

1. 認定ストーリーの特徴

徳島県北部を東西に貫流する吉野川の流域では古くから「藍」が栽培されていました。阿波の北方と呼ばれるこの地域は、江戸時代後期から明治時代には藍染料の一大産地となり、今なお日本一の藍染料の産地として日本の染織文化を支えています。

阿波の藍染料は、かつて藍商人により全国に流通し、全国市場での人気を独占しました。そして、阿波の藍商人は大きな富を得ました。富を得た藍商人は、さまざまな業種の多角経営に乗り出し、徳島はもとより日本経済にまで影響を及ぼす企業にまで成長した者もいたのです。また、全国を雄飛した藍商人は文化交流の担い手となり、徳島のさまざまな文化に影響を及ぼしました。芸事を好んだ藍商人は、阿波おどりや人形浄瑠璃などの徳島を代表する芸能を育んだのです。

現在の徳島の景観や文化を形成したのは藍商人であるといっても過言ではありません。



藍染料の製造風景

2. 認定ストーリーを活かした活用事例

徳島県では、県民の藍に関する関心と理解を深め、藍に関する文化の継承及び産業の振興を図り、あわせて国内外に向けたその魅力の発信に資するため、7月24日を「とくしま藍の日」として定める条例を制定しています。そして、7月を「とくしま藍推進月間」として藍に関するさまざまな事業が行われています。

また、県内の市町村における取り組みの一つとして、藍住町の事例を紹介しましょう。藍住町は、町名に「藍」の文字が入る全国で唯一の町で、そこから分かりますとおり、かつては「藍」の一大生産地でした。しかし、平成23年を最後に町では「藍」の栽培が途絶えてしまっていたのです。この伝統産業を復活させ、地域の活性化を図るために、地域おこし協力隊制度を活用して、藍の栽培・藍染料の製造・藍染めの技術の習得者を育成しています。そして、地域おこし協力隊の卒隊者や役場の退職者が中心となり、「藍」の文化を検証し、この地域の特徴や魅力、特有の歴史を背景とした景観、そこにあるストーリーを大切にしながら、再び藍産業の発展を目指すことを目的として法人を設立しました。「藍」の文化や産業を人づくり・仕事づくりにつなげ、地域づくりにつなげる取り組みをすすめています。



藍住町で復活した藍畑

3. 今後の展開

今年度、文化庁の委託事業である日本遺産魅力増進事業の採択を受け、「藍のふるさと阿波魅力増進事業」を進めています。当事業は、「群馬の絹糸」を「山形の紅」と「徳島の藍」で染め上げ、「八王子の織り」で製品化する、日本遺産地域が連携した商品の造成が柱となっており、地方へのインバウンドの誘客を目指し、地方の活性化を目指す取り組みとなっています。大学生や高校生を巻き込んだ取り組みともなっており、次世代を担う人材の育成も進めます。また、地元のDMOと連携し、インバウンドをターゲットとした高付加価値のツアー造成も進めています。このツアーは、地元の日本遺産ストーリーとの連携商品となっており、徳島の歴史・文化を大いに楽しめるものです。

これらの取り組みの成功が当面の目標であり、そのことにより日本遺産を核とした持続性のある地域づくりを進めていきたいと考えています。



藍住町歴史館「藍の館」

霊気満山 高尾山

～人々の祈りが紡ぐ桑都物語～

八王子市 生涯学習スポーツ部長 平塚 裕之

1. 認定ストーリーの特徴

絹産業を基盤として発展し“桑都(そうと)”と称された八王子。戦国時代に関東を治めた北条氏の名将・北条氏照がこの地に居城を築いたことから始まり、霊山・高尾山への人々の祈りが、この地に育まれた豊かな文化を未来に紡いでいく物語を、「桑都物語」と表現し、ストーリータイトルにも込めました。

ストーリーで使われる「桑」「お蚕」「養蚕」「絹」「機織」「織物」「絹の道」といった単語は、桑都の人々にとってなじみの深い、そして、大切なものとして心に響きます。幕末から明治期にかけて八王子に集荷された生糸の輸出は、日本の近代化を支えました。明治期後半に京都西陣、桐生に次いで、全国3位の売上高を誇った八王子の織物は、時代の移り変わりとともに生産高は減少しましたが、現在も、ものづくりを支える職人の技術やおもいととも、若手のデザイナーやクリエイターにも裾野を広げて受け継がれ、未来に紡がれています。



織物のまち八王子

2. 認定ストーリーを活かした活用事例

令和2年度の認定後、日本遺産の魅力や情報の発信拠点として「桑都日本遺産センター 八王子博物館」や多摩織の伝統工芸士の指導で手織り体験ができる「多摩織工芸館」を整備し、八王子の織物を今に伝えています。

また、市内の繊維産業を担う方々と連携し、古い織物工場を舞台にした工場見学や、かつての女工さんの生活に触れながら、残していきたい大切な八王子の織物の歴史を体感する集客型イベント、日本庭園を有する古民家を会場に、全国から集まった若手のつくり手との交流型イベントを開催するなど、染織の文化を紡ぐ取組を行っています。

東京都内で唯一残された養蚕農家が八王子にあります。小学校やささまざまな施設で、繭からの糸取り体験を行い、子どもを中心に「養蚕」について学ぶ機会を設け、お蚕様の命をいたわることができる「生糸」・「絹」の尊さを伝えています。

八王子市は21の大学を抱える全国有数の学園都市でもあります。テキスタイルやデザインを学ぶ大学生がものづくりの現場と連携しながら、新たなテキスタイルデザインを創出する事例が日本遺産の認定後に増えています。近隣の日本遺産認定地域でもある桐生市。古くから交流のある土地柄ですが、一昨年の「日本遺産サミット in 小松」における「織物の文化」分科会を一つの契機として、織物の展示やイベントなどにおいて、桐生市と八王子市相互の新たな官民の交流・連携が進んでいます。



伝統工芸士

3. 今後の展開

八王子市では、市の基本構想・基本計画を10年ぶりに改訂し、令和5年度に「八王子未来デザイン2040」を策定しました。ここでは、「日本遺産をきっかけとして、桑都文化を磨き上げ、地域活動や地域の産業・経済の活性化をはかるほか、豊富な資源を活用した地域主体の観光まちづくりの推進」を重点テーマの一つに掲げています。計画の軸となる「文化」「教育」「産業」「まちづくり」の各分野のさまざまな施策の中で日本遺産を横断的に活用していく考えです。

また、日本遺産そのもののブランド力向上を目指す上でテーマや地域ごとの認定地域間の連携・交流も不可欠であると考えます。地域間連携により、連携のストーリー化や、産地間コラボ商品の開発等、新たな魅力を創出し、さらなる磨き上げを行っていく必要があると考えます。



多摩織

第2分科会 山岳信仰・修験の文化—信仰の文化がつなぐ人・地域—

日本では「山岳信仰・修験」が古来より独自の宗教文化として発展し、今も各地に息付いています。第2分科会では、北海道大学から天田准教授をコーディネーターに迎え、事例紹介とディスカッションを行います。今日まで守り受け継がれてきた信仰の文化をどのように継承していくのか。また、インバウンド対応を含め観光振興に活かし、どのように地域の活性化へとつなげるべきか。日本遺産のストーリーを基軸に地域が一体となって取り組む事例から、そのヒントを探ります。



No.12 国宝投入堂への参拝



No.20 羽黒山の峰入り



No.24 大山詣り～納め太刀～



No.99 虎島に向かう修験者

【コーディネーター】

北海道大学 大学院メディア・コミュニケーション研究院 准教授 天田 顕徳

日本遺産のストーリーのタイトル及び参加団体

012 六根清浄と六感治癒の地 ～日本一危ない国宝鑑賞と世界屈指のラドン泉～

三朝町日本遺産活用推進協議会

020 自然と信仰が息づく『生まれかわりの旅』

～樹齢300年を超える杉並木につつまれた2,446段の石段から始まる出羽三山～

出羽三山「生まれかわりの旅」推進協議会

024 江戸庶民の信仰と行楽の地～巨大な木太刀を担いで「大山詣り」～

伊勢原市日本遺産協議会

099 「葛城修験」—里人とともに守り伝える修験道はじまりの地

葛城修験日本遺産活用推進協議会

六根清浄と六感治癒の地

～日本一危ない国宝鑑賞と世界屈指のラドン泉～

三朝町日本遺産活用推進協議会 藤井 紀好

1. 認定ストーリーの特徴

修験道の聖地三徳山(みとくさん)は、慶雲三年(706)修験道の開祖 役小角(えんのおづぬ)が「神仏のゆかりのあるところへ落としてください。」と三枚の蓮の花びらを空に投げ上げたところ、一枚が三徳山へ舞い降りたことから修験道の行場として開いたことが始まりとされ、「蓮の花びら伝説」として現在も語り継がれています。三徳山の魅力は、急峻な地形と豊かな自然、そして神仏習合の特異な意匠・構造を持つ建築とが渾然一体となって織りなす独特の景観にあり、国宝「投入堂(なげいれどう)」もまた、その一部として重要な役割を果たします。人を寄せ付けぬ厳かさは1300年にわたって守られ続け、今日も人々に畏敬の念を抱かせます。三徳山では仏像、写経、読経、座禅、精進料理などで己の欲や迷いを断ち切り、国宝投入堂へと続く「行者道」を進むことで、「六根清浄(眼・耳・鼻・舌・身・意を清めること)」が出来るとされています。

そんな三徳山への参拝前に心身を清める場所として、三徳山参詣の拠点を担った三朝温泉は、源義朝の家来、大久保左馬之祐(さまのすけ)が発見したものとされ「白狼伝説」として伝わります。左馬之祐が主家再興の祈願のため三徳山に参る道中、年老いた白い狼を見つけたが、年老いた動物は神仏の化身かもしれないと見逃がしてやったところ、白狼を助けたお礼として妙見菩薩から出湯の場所が示されたこととされるので、その場所は「株湯」として今に伝えられています。そして三朝温泉では、修験道の聖地三徳山において行を重ね、六根清浄を終えて山を下り、三朝温泉の湯を飲み、浸かり、湯煙に身を置き、再び自然の恵み、自然の力を全身に授かることで六感を癒す。これをいわゆる「六感治癒(観、聴、香、味、触、心を癒やすこと)」と言っています。

今日、三徳山で「六根」を清め、三朝温泉で「六感」を癒す一連の作法は「人と自然が融合する日本独自の自然観」を特徴的に示したものであり、心と体を洗うことで誰もが持つ清らかさが蘇る地としてあり続けています。



修験者体験(三徳山)

2. 認定ストーリーを活かした活用事例

三朝温泉は世界屈指のラドン泉として、開湯以来、湯治場として栄えてきました。現在は「湯治」を現代の生活スタイルに合わせてアレンジし、生活習慣病の改善やリフレッシュ、ストレス解消などを目的とした「現代湯治」を提唱しています。対応する16旅館には三朝温泉の入浴アドバイザー「ラヂムリエ」が在籍し、その効能や効果について知ることができるほか、地域の医療機関と連携した温泉治療も受けることができます。

令和4年度から本分科会のテーマでもある「修験」に係る認定地域との連携を進めており、文化庁の日本遺産における魅力増進・コンテンツ造成事業を活用し、今年度「修験」を共通テーマとした旅行商品を催行することとなりました。認定ストーリーの魅力や価値の体験によってそれぞれのファンを作ることはもちろん、共通テーマによる相互の認知向上や誘客を目指し、今後も取組みを深化させることとしています。



昭和レトロな夜の温泉街

3. 今後の展開

三徳山と三朝温泉は、どちらも体験型の日本遺産ストーリーであることから、日本人のみならず海外からのお客様にとっても地域の文化を肌で体験でき、インバウンドへの波及力は高いと考えられます。このため、域内の施設やコンテンツの高付加価値化を進めるとともに、外国人観光客の受入環境の整備や海外への情報発信を更に進めることで、インバウンドの獲得を図ります。また、日本遺産ストーリーの共通テーマなどによる他地域との連携を進めることで、観光誘客における相乗効果を図り、相互の地域活性化を目指します。



三朝温泉入浴アドバイザー「ラヂムリエ」

自然と信仰が息づく「生まれかわりの旅」

～樹齢 300 年を超える杉並木につつまれた 2,446 段の石段から始まる出羽三山～
出羽三山「生まれかわりの旅」推進協議会 松本 陽子

1. 認定ストーリーの特徴

山形県の中央に位置する出羽三山。羽黒修験道はその雄大な自然を背景に生まれました。

羽黒山は現世利益を叶える「現在の山」、高く秀麗な月山は祖霊が鎮まる「過去の山」、湯殿山は新しい生命の誕生を表す「未来の山」と見立てられ、江戸時代の庶民の間では、三山を詣でることで現在・過去・未来を巡り、生きながら新たな魂として生まれかわることができるとして、多くの信仰を集めてきました。

三山の周辺地域には登拝口が点在し、別当寺が造立されると、参詣人を迎えるための宿坊街が形成されて賑わいを見せました。その多くは既に失われてしまいましたが、羽黒町手向地区には今も宿坊街が残り、日々の営みの中に信仰との結び付きを感じることができます。

そうした地域の人々に支えられながら、今に息づく「生まれかわりの旅」。その入り口でもある羽黒山の参道に足を踏み入れれば、天を覆うような杉並木が山頂まで続き、訪れる者に自然の霊気と自然への畏怖を感じさせ、明日への活力を与えてくれます。

2. 認定ストーリーを活かした活用事例

江戸時代、東の奥参りとして大勢の参詣人を得たように、古くから出羽三山は、山形県を代表とする観光地として牽引的な役割を果たしてきました。そのような背景もあり、当地域では従前から多くの団体・個人がそれぞれ独自の取組みを重ねています。

構成団体や民間事業者等を主体とする近時の取組みとしては、結果を意味する「注連（しめ）」を首から提げ、非日常感と共に羽黒山の石段を登って参拝していただく「石段詣」のプログラム造成や、山伏が参道で来訪者を迎え、写真撮影や説明等の求めに応じる「参道山伏」といった取組みが挙げられます。

参詣道である六十里越街道や羽黒古道では、季節ごとにテーマを設定した「古道ツアー」なども開催され、時に旬の味覚も織り交ぜながらアクティビティを好む層にご好評をいただいているところです。

他方、協議会主体としては、有形無形の「山の恵み」を受けながら出羽三山地域で暮らす人々を紹介した動画「山が私たちが形づくる」の作成など、人材交流や育成、普及啓発を中心とした取組みを進めてきました。この時ご縁を得た方々にもご協力いただき、令和3年度から地域の親子を対象とした伝統文化体験事業「YAMAGATA BATONS（ヤマガタバトンズ）」を実施しているところですが、これらの取組みは、サブストーリーの抽出という成果ももたらしたと考えています。



石段詣



「山が私たちが形づくる」より

3. 今後の展開

前述のとおり、各個の強みを活かした活動は様々な団体・個人によって活発に展開されてきたところですが、今後は三山地域全体としての戦略立案や、羽黒山への参詣者を他エリアへ回遊させる試みなどを通じて、訪れた方にさらに深く「生まれかわりの旅」の魅力について知っていただくことが必要と考えます。

そのため、現行の地域活性化計画において、三山地域としての取組の方向性を検討したり、周遊や再訪を促進するような仕掛けづくりに取組む体制の構築を目指しているところです。

また、これまでも「修験」や「山形県」等のテーマやエリアといった視点から、他の日本遺産協議会との連携による情報発信等に取り組んできたところですが、今後も引き続き効果的な情報発信や相互の誘客促進を図るとともに、それぞれの違いや共通点を理解することで改めて自地域の「特徴」や「強み」が何であるかの認識を深め、次の展開に繋げていきたいと考えています。

江戸庶民の信仰と行楽の地 ～巨大な木太刀を担いで「大山詣り」～

伊勢原市日本遺産協議会 事務局 松尾 龍

1. 認定ストーリーの特徴

「大山詣り」は、鳶などの職人たちが、巨大な木太刀を江戸から担いで運び、滝で身を清めてから奉納と山頂を目指す他に例をみない庶民参拝です。そうした姿は歌舞伎や浮世絵でもとりあげられ、また手形が不要な小旅行であったことから、人々の興味関心を引き起こし、江戸の人口が100万人の頃に年間20万人もの参拝者が訪れました。

大山詣りとして隆盛を誇ったのは江戸時代からとされていますが、大山の山頂からは、縄文時代の土器が出土しており、より古い時代から大山に対する信仰が芽吹いていたことが分かります。奈良時代には大山寺や霊山寺（現・日向薬師宝城坊）などが創建され、平安時代にまとめられた「延喜式神名帳」に、阿夫利神社（現・大山阿夫利神社）の名が見られることから、この時代までに大山の神性が寺社という形で整えられていったと考えられています。

大山の修験は、大山寺や日向薬師を中心に相模修験の一派として活動していたと考えられます。しかしながら、江戸時代の山内改革や明治時代の廃仏毀釈などの影響もあり、多くの資料が喪失し、残念ながら当時の様子をうかがうことはできません。

戦国時代の覇権争いや徳川家康による改革を背景に、修験の山から、庶民信仰の山へと裾野を広げ、今で言う「観光」要素の強い庶民ニーズに沿った姿に変化していったことが、「大山詣り」の大きな特徴となっています。明治以降の社会変化においても、御師から名を改めた先導師たちを中心に大山の信仰が守られ、今に受け継がれています。



大山全景

2. 認定ストーリーを活かした活用事例

大山詣りの取組として平成30年から、「宿坊体験型教育旅行」の受入れを行っています。

中学校の修学旅行や体験学習を先導師旅館（宿坊）での分宿という形で受入れるもので、宿坊への宿泊を体験の中心として、先導師による大山の歴史の説明、先導師の案内で大山に登る「大山詣り体験」のほか、浄書や大山とうふ作り体験などのオプションを用意して、学校の趣向に合わせた教育旅行を地元観光協会と連携して造成しています。

コロナ禍で、遠方からの招致には苦戦したものの、関東近郊を中心に徐々に広がりを見せ、令和5年は5校の受入れを行います。今後の更なる広がりを期待しています。



宿坊体験型教育旅行の様子

3. 今後の展開

教育旅行の受入拡大と合わせ、教育旅行で培った体験コンテンツを一般向けやインバウンド向けにアレンジし、新たなツアー造成などを検討しています。そうした中では、団体宿泊を得意とする宿坊において、個々のお客様の趣向に合わせた個人旅行として、いかにして収益性を持たせるかが課題となります。

また、構成文化財の一つである日向薬師が所在する日向地区では、修験の伝統を伝える「神木のぼり」の行事を復興させる取組や「日向石」の普及・再活用などが地元団体によって取り組まれています。地元団体や他地区の修験や石工の取組を研究して、「日向修験」などのサイドストーリーの創出を新たな日本遺産の展開として検討しています。



日向薬師 神木のぼり

葛城修験

一里人とともに守り伝える修験道はじまりの地

葛城修験日本遺産活用推進協議会 鶴野 尚樹

1. 認定ストーリーの特徴

大阪と和歌山の府県境を東西に走る和泉山脈、大阪と奈良の府県境に南北に聳える金剛山地——総延長112kmに及び、多くの神々が住まう山として人々に崇められてきたこの峰々帯は「葛城」と呼ばれ、独自の修験道の文化が花開いた地です。そして、7世紀にその麓の地である現在の奈良県御所市で生まれたのが修験道の開祖と言われている役行者です。

役行者はこの葛城の地に法華経8巻28品（品＝仏典の章や篇）を1品ずつ埋納したと伝えられており、修験者たちはその法華経が納められた1～28番の経塚や滝、巨石、役行者にゆかりのある寺社や祠などを巡ります。これらの修行や行場を総称し「葛城修験」と呼んでいます。

さて、この葛城修験ですが大きな特徴が2つあります。1つは、葛城修験のスタート地点、第1番目の経塚のある場所が、山岳修行を行う修験道には珍しく和歌山市加太沖に浮かぶ無人島友ヶ島であり、海から始まる修験の道であるということ。もう1つは、一般的に修験道の修行は深い山の中で行うものですが、葛城修験の地に連なる山々はさほど高くなく、一番高い山でも奈良県と大阪府にまたがる金剛山でその標高は1,125m。それ故、他の修験の地に比べて葛城修験は里との結びつきが強く、修験者たちは地域の信仰にも深く関わり、また里人たちも、そういった修験者たちを受け入れ、厚くもてなしてきた歴史があります。

「海から始まる修験道」「里人とともに守り伝えられてきた修験道」。この2つが日本遺産葛城修験を語る上での特徴的な点となっています。



第一番目の経塚がある友ヶ島（虎島）

2. 認定ストーリーを活かした活用事例

令和3年には日本遺産葛城修験の認知度向上及び現地訪問者数の増加を目的として、登山アプリの中で日本一のダウンロード数を誇る「YAMAP」と連携し、認定ストーリーを体感していただくためのデジタルスタンプラリー企画を実施しました。28の経塚を巡っていただくための企画で、現在までに12,000人以上の方が参加しており、非常に大きな反響をいただいています。

また、ストーリーを体感いただくためのツアー造成にも力を入れており、プロモーションのかいもあって現在複数の旅行会社が現役の修験者をガイドにした葛城修験の体験ツアーを催行しています。参加者の方からは「修験者の方の修行や考え方を知れてよかった」や「普段の山登りと違った精神的な体験ができてよかった」などの声をいただき好評を得ているところです。



修験者をガイドにしたツアーの様子

3. 今後の展開

葛城修験は、日本遺産に認定されたと言ってもまだまだ認知度が低いことが大きな課題の一つとなっています。その課題を解決するため、現在本分科会の参加メンバーである修験に関する日本遺産の団体等と連携し、SNS等を通じて相互にPRする取組を行っているところです。今後はさらにその連携を深め、日本全体で「修験」及び「日本遺産」の認知度を高めていき、結果として葛城修験への誘客にも繋がるよう取組を展開していきたいと考えています。

また、葛城修験単独でもその歴史的価値及び文化的な意義そして観光としての魅力をしっかりとPRしていくため、行政だけでなく、旅行会社等の民間事業者や広域で活動するDMO、さらには教育機関との連携など、多種多様なステークホルダーを巻き込みながら事業を展開していきたいと考えています。

第3分科会「食文化」を活かした地域活性化に向けて

「食文化」は、そこに暮らしてきた人びとの誇りであり、旅人をその地に誘う大きな魅力です。日本遺産ストーリーの舞台となっている地域にも、行事食、ユニークな食材、調理法、共食の作法など、そこにしかない「食文化」があります。飲食店でのメニュー開発、商品化の試みなども含め、そうした「食文化」の活用事例を共有し、「食」が生み出す地域活性化について意見交換します。



No. 10 ぼたん鍋



No. 33 大山おこわ



No. 35 海軍カレー



No. 51 ゆず寿司皿鉢

【コーディネーター】

特定非営利活動法人 地域文化計画 村中大樹

日本遺産のストーリーのタイトル及び参加団体

- 010 丹波篠山 デカンショ節 -民謡に乗せて歌い継ぐふるさとの記憶-
一般社団法人丹波篠山市観光協会
-
- 033 地蔵信仰が育んだ日本最大の大山牛馬市
日本遺産大山山麓魅力発信推進協議会
-
- 035 鎮守府 横須賀・横須賀・呉・佐世保・舞鶴 ~日本近代化の躍動を体感できるまち~
旧軍港市日本遺産活用推進協議会
-
- 051 森林鉄道から日本一のゆずロードへ
- ゆずが香り彩る南国土佐・中芸地域の景観と食文化 -
中芸のゆずと森林鉄道日本遺産協議会

丹波篠山 デカンショ節

—民謡に乗せて歌い継ぐふるさとの記憶—

一般社団法人 丹波篠山市観光協会 今井 めぐみ

1. 認定ストーリーの特徴

民謡「デカンショ節」発祥の地「丹波篠山」は、江戸時代の町並みを多く残し篠山城を中心とした重要伝統的建造物群保存地区、日本六古窯「丹波焼」の郷、そして、地域で受け継がれている美しい農村風景が広がっています。また、篠山盆地特有の気候による最高級の「黒豆」や「丹波栗」などの特産物や「ぼたん鍋」など農村らしい食文化があり、食の宝庫とも呼ばれます。

これらの豊かな歴史、文化、自然、食が歌詞に唄い込まれたデカンショ節は、今や400番にものぼり、丹波篠山市にはデカンショ節の歌詞で表現される風景が、脈々と息づいているのを感じられます。



2. 認定ストーリーを活かした活用事例

♪雪がちらちら 丹波の宿に 猪が飛び込む ぼたん鍋

「ぼたん鍋」は、丹波篠山発祥のおもてなし料理で、味噌ベースの出汁に猪肉と地野菜を入れて煮る鍋料理です。主に狩猟が解禁となる冬の風物詩で、雪の降る宿でぼたん鍋が食されている情景がデカンショ節に唄われています。

1908年(明治41年)ごろ、多紀郡篠山町に陸軍歩兵第70連隊が駐屯し、訓練時に捕獲したイノシシの肉を味噌汁に入れて食べており、丹波篠山の猪肉は大変美味であると全国に広がりました。その味噌汁を、軍の幹部などへのもてなし料理として料理旅館で提供されたものがぼたん鍋となりました。2007年には、農林水産省主催の「農山漁村の郷土料理百選」の兵庫県を代表する料理として選定。2022年には、文化庁が認定する「100年フード」に選ばれ、認定された131件の中からさらに15件に贈られる【有識者特別賞】を受賞しました。

今もなお丹波篠山市内にあるぼたん鍋を提供する料理旅館や飲食店約40店舗が、お客さまをもてなしています。100年フードの認定を機に、大晦日とお正月にぼたん鍋の振る舞いや、デカンショ節を鑑賞しながら古民家でぼたん鍋を食す体験ができる田舎暮らし体験ツアーを実施するなど、歌詞に唄われるような丹波篠山のあらゆる魅力を体で感じながら、ぼたん鍋を味わうことができるような機会を創出しました。また学校給食や市内イベントでもぼたん鍋(ぼたん汁)を提供するなど、丹波篠山の人々の暮らしに溶け込むような取り組みも行っています。



ぼたん鍋

3. 今後の展開

ぼたん鍋は「美味しい」食文化というだけでなく、実は獣がいの対策にも繋がっています。現在、農業の獣がいによる被害額は155億円となっており、獣がいにより農業をきりめらる方も少なくありません。100年フードの認定を機に、ぼたん鍋を多くの方に召し上がっていただくことを通して、デカンショ節に唄われるような美しい農村風景を守っていく取り組みを進めます。

「デカンショ節」、またデカンショ節に唄われるあらゆる地域資源に触れ、体験できる機会を創出することで日本遺産を後世へ引き継いでいきたいと考えています。



地蔵信仰が育んだ日本最大の大山牛馬市

大山町役場 観光課 主任 細谷 菜美子

1. 認定ストーリーの特徴

大山牛馬市 (昭和6年)

鳥取県西部に位置する中国地方最高峰の大山(だいせん)は、古くから信仰の対象とされ、山麓地域では大山の神と地蔵菩薩が集合した大智明権現(だいせんさん)の地蔵信仰を中心に、さまざまな要素が加わった大山信仰をもとに、独自の文化、歴史が形成されてきました。ストーリーでは、大山から始まった地蔵信仰に由来する文化歴史と、「大山さんのおかげ」という言葉で表される大山からの恵みへの感謝の気持ちが、今も地域に暮らす人々の生活や意識の中に息づいていることを紹介しています。



大山の地蔵菩薩と恵みの水(利生水)にご加護を求める地蔵信仰から発生した牛馬信仰は、大山寺のお膝元「博労座」で開催される牛馬市の開催のきっかけとなりました。江戸時代中頃、この信仰を背景として大山寺が牛馬市を改革して運営を始めますが、これは他地域では見られない大山牛馬市の特徴です。大山信仰圏と牛馬流通圏の中心となった大山には多くの人が往来し、大山へ通じる「大山道」沿いは大いに賑わいました。この賑わいは現在も行事、風習、道標や石畳などにより、往時の面影を見ることが出来ます。食文化もその一つで、大山寺の高僧が奨励したことで栽培が盛んになった「大山そば」・腹持ちのいい「大山おこわ」は当時、おもてなしの食、携帯食として、祭りや牛馬市などの行事に欠かせないグルメでしたが、現在でも「大山の恵み」を代表する食として地域や各家庭に伝わっています。

2. 認定ストーリーを活かした活用事例

大山山麓の伝統食である構成文化財「大山おこわ」が令和4年に100年フードに認定されました。普段当たり前に食べている食事が日本遺産や100年フードに認定されたとしてメディアに取り上げられたことで、あらためて地域住民が地域の歴史文化・魅力を再発見する機会となりました。

もともと大山おこわを提供する飲食店もあり、地元女性団体がイベントで販売することもありましたが、この認定を機に、改めて地域の食文化であることを伝える取り組みも見られるようになりました。さらに郷土の味を身近に感じてもらいたいとの思いを持つ事業者が、家庭の炊飯器で簡単に調理できるキットを開発・販売し、同じく構成文化財で広い地域で親しまれる「大山そば」とセット販売するなど、日本遺産と地域の食の魅力を発信しています。

歴史文化への理解を深める取り組みとして、地元団体が地域住民と協力し、子供を対象としたお地蔵さまの清掃イベントを開催しています。また実際に大山牛馬市が開催されていた場所を会場に、現代の動力源である車(ランボルギーニとフェラーリ)を集め牛馬市の賑わいを再現しようというイベントを計画しています。歴史文化だけではなく車といった新たな客層の取り込みと県内外への情報発信により来訪・再訪を促しています。



大山日本遺産定食

3. 今後の展開

当地域の課題の一つとして、ストーリーに登場する「信仰」「牛馬市」が主要な構成要素にもかかわらず可視化できないものであるために理解が難しいことが挙げられます。そこでストーリーと構成文化財の活用の切り口を変えることにより、ストーリーの理解や再周知に繋がる方法を検討しています。

大山は国立公園に指定されており、その山麓のほとんどの河川では川の生態系のシンボルともいえる特別天然記念物のオオサンショウウオが生息するなど、美しく豊かな自然環境を有しています。大山に広がる西日本最大級のブナ林から生み出される「水」は、山麓に恵みをもたらす象徴です。大山の地蔵信仰が「水」と深く関連していることに着目し、大山の恵みと地蔵信仰との繋がりを再確認することで、ストーリーの活用の幅を広げ、魅力発信・地域の活性化につながる取り組みを進めます。



木谷沢溪流

鎮守府・横須賀・呉・佐世保・舞鶴

～日本近代化の躍動を体感できるまち～

舞鶴市観光まちづくり室 室長 三輪 紀子

1. 認定ストーリーの特徴

横須賀・呉・佐世保・舞鶴の四市に共通するのは、天然の良港を有し、鎮守府が置かれたことです。鎮守府とは海軍の本拠地のことで、明治期、海防を強化するために、国家プロジェクトとして、最先端の工業技術や設備を集積し、軍港施設や工場の他、水道をはじめ鉄道、碁盤目状の市街地などの都市インフラが整備され、四つの軍港都市が誕生しました。

当時建設された赤れんがが建造物や港湾施設など、100年以上が経過した今でも現役で使われているものもあり、日本が近代化に向けて躍動した往時の姿を残す旧軍港四市は、どこか懐かしくも遅しく、今も訪れる人を惹きつけてやみません。海軍が地域にもたらしたものは、映画や音楽などの娯楽から「食」にも及び、海軍が栄養不足解消のために、西洋式の食事を取り入れたことが、日本における洋食の始まりと言われています。構成文化財の1つ、明治41年に海軍が発行した料理教科書『海軍割烹術参考書』には、100種類を超える西洋料理やスイーツメニューが掲載されています。カレーやビーフシチュー、海軍発祥と伝わる肉じゃがなどが、四市特有の食文化としてまちに受け継がれ、人々に愛され続けています。



肉じゃが

2. 認定ストーリーを活かした活用事例

旧軍港四市は、「海軍ゆかりの食文化」を共有しており、四市海軍グルメが一堂に会するグルメ交流会を市民団体等が主体となり開催しています。毎年多くの人々が訪れ、家庭料理となったカレーや肉じゃがが、海軍ゆかり食文化であることを認識してもらう絶好の機会であり、四市の市民交流の場にもなっています。また、大手企業とコラボした「海軍カレーパン」の商品化や「ホットウィスキー」の復刻など、民間企業の発信力が、認定ストーリーの認知度向上に大きく寄与しています。令和4年には、文化庁の「100年フード」に「海軍ゆかりの食文化～海軍カレー・ビーフシチュー・肉じゃが～」が認定され、舞鶴市では認定を記念し、民間企業コラボ商品の再販や海軍ゆかりのレストラン「松栄館」で、京都老舗の料理長がアレンジした海軍料理を提供するグルメイベントを実施しました。



四市共通 日本遺産ポスター

3. 今後の展開

軍港都市として発展してきた四市は、終戦にともなう海軍の廃止により、市の存立基盤を失い、人口も減少しました。復興と都市再生への道として、旧軍用財産を活用し平和産業都市に転換するため、昭和29年に「旧軍港市振興協議会」を設立し連携して旧軍用財産の転換・活用を図ってきました。平成28年の日本遺産認定を契機に、同協議会を母体とした「旧軍港市日本遺産活用推進協議会」を設立し、これまで培ってきた四市の連携体制を基盤に、日本遺産ストーリーの発信・周知に向けた事業を推進しています。

協議会は、観光協会や商工会議所の他、宿泊・交通・土産物等の観光事業者、金融機関、観光ガイドなど多様な主体で構成され、それぞれが役割を果たすことで、日本遺産を活用した自立自走可能な観光事業を目指しています。

シリアル型のスケールメリットを生かすために、各市が連帯感や共通性を発信し、スタンプラリーなどの周遊促進事業にも取り組んでおり、今後、さらなる周遊の仕組みづくりを進めていきたいと考えています。また、地元の工業高等専門学校や大学等の研究機関と連携し、構成文化財やストーリーの新たな価値の発見や魅力の深化に努めるとともに、市民がまちの歴史や文化を理解し、誇りに思うことが重要であることから、小学生用のパンフレット作成や学校への出前講座などを実施し、ストーリーの普及に力を入れ、産・官・学と市民の連携のもと地域活性化に取り組んでいます。



四市グルメイベント

森林鉄道から日本一のゆずロードへ

—ゆずが香り彩る南国土佐・中芸地域の景観と食文化—

中芸のゆずと森林鉄道日本遺産協議会 山村 有紀子

1. 認定ストーリーの特徴

林業から果樹の産業へ。中芸地域5町村(奈半利町・田野町・安田町・北川村・馬路村)を支えてきた産業の変遷が私たちの物語です。ストーリーを支える二本の柱は、林業の象徴としての森林鉄道と柚子(ゆず)です。森林鉄道はすでに廃線から60年近くが経過、線路はすべて撤去され、明治末から昭和のはじめにかけて建造された鉄橋や隧道だけが遺されています。本来、伐採した材木を運び出すための専用施設でしたが、中芸地域では、沿線に点在する集落を結び、そこに暮らす人びとの生活の足でもありました。通勤、通学、仕事も遊びも、沿線のひとの暮らしのなかには、いつも森林鉄道の風景があったのです。その後それらの遺構群は、国指定重要文化財「旧魚梁瀬森林鉄道施設」となり、森林鉄道の歴史は、地域の人びとの誇りとなりました。

林業に続いて中芸地域を支える産業となったのは、ゆず関連産業です。ゆずは、中芸地域の人びとにとって昔から身近な存在でした。かつてはどの家の庭先にも植えられており、食卓には欠かせないものでした。晩秋、黄色く色づいたゆず玉から、ゆの酢と呼ばれるしぼり汁をとります。お刺身や焼き魚にかけるだけでなく、中芸地域では、すし飯にも使います。まさに中芸の食文化の中心です。この、あたりまえの食材からゆずポン酢しょうゆなどの加工品をつくり、生果を輸出するなど、ゆずの産業化に取り組んできた結果、中芸地域を合わせると、ゆず生産量は今や日本一です。収穫時期、地域中に立ち込めるゆずの香りの中を、収穫したばかりのゆず玉を満載した軽トラックは、かつての木材を満載した森林鉄道が走った軌道跡を行き来しています。

日本遺産の制度ができた時、私たちは、歴史となった森林鉄道の時代と現代のゆず関連産業をつないでひとつの物語を語ることにしました。森林鉄道とゆずの一見不思議な組み合わせの謎解きをしつつ、そこに景観や食文化を織り込むことで、私たちの物語は、中芸地域全体の物語となっています。



田舎すし

2. 認定ストーリーを活かした活用事例

認定時に悩まされたのは、日本遺産はどこですか?という質問でした。ストーリーが認定される日本遺産自体は、見ることも触れることもできません。日本遺産ストーリーを可視化し、体験できるものにするにはどうすればよいか。そこではじまったのが、オンパク手法による、“小さな体験プログラムを集めて短期間に提供する”体験イベント「ゆずFeS」です。認定の翌年からはじまり、これまでに9回開催されたゆずFeSから生まれたさまざまな体験プログラムの中には、ゆず収穫体験、ゆず搾り体験、伝統料理の再現など、食に関わるものが含まれています。トレッキングなどのプログラムでも、食事付の場合は、中芸の食を愉しんでもらえるお弁当を提供しています。

構成文化財「ゆず料理」は、100年フード認定を受けることによってイベント出展の機会が増えています。



ゆず関連商品

3. 今後の展開

人口減・高齢化という課題を抱える中芸地域において、日本遺産としては、関係人口の創出と深化を促すことで、課題解決に貢献したいと考えています。日本遺産を起点に、ひとの交流が生まれる場を今後もつくり、イベントへの相互参加などで近隣の日本遺産との連携を深めていきます。インバウンドに関しては、高知県あげての積極的な取り組みもあることから、台湾からの誘客に絞って展開しています。そうした場でも、食文化は中芸の魅力を伝える重要な要素だと考えています。



ゆず畑

日本遺産分科会 2023 総括討論

コーディネーター 丁野 朗

1. 日本遺産分科会の総括

～地域ブランドを繋ぎ、ジャパン・ブランドへ～

今年の日本遺産フェスティバルの共通テーマは、「“桑都”八王子から104の物語を未来へ」です。開催地八王子の高尾山は、日本のインバウンド観光を代表する山ですが、この山が今日まで人々に愛され続け、美しい姿を保っている背景には素晴らしい物語があります。

高尾山には、名だたる戦国武将から戦の神として信仰された飯縄大権現を本尊とする薬王院があり、北条氏照は武運とともに、領地の寄進や竹木伐採を禁じるなど、高尾山を篤く庇護しました。また氏照が礎を築いた八王子織物の商人たちは、薬王院への諸願成就の返礼として杉の苗木を奉納して山を守りました。こうした古くから続く活動は、八王子だけの物語ではなく、日本に古来からあるSDGsの考え方でもあり、日本という国を象徴する物語でもあります。

その八王子で開催する今年の分科会では、日本遺産ストーリーを「I. 染織の文化」、「II. 山岳信仰・修験の文化」、「III. 食文化」の3つのテーマで括る分科会を開催します。日本遺産には、全国で104の魅力的な物語がありますが、それぞれの物語は、地域ごとのブランドであると同時に、日本という国を象徴するジャパン・ブランドでもあります。

個々の地域物語を俯瞰すると、わが国の文化・歴史の深みや多様性、豊穡さを理解することができます。そのことが国内外の人々を魅了し、日本全体の魅力につながるものと思います。各地域がそのことに気づき、地域の垣根を越えてダイナミックに交流することから、地域ブランドからジャパン・ブランドになります。

他方で、各地で日本遺産を担っている方々は、日々、地域文化の保全と活用に大変な努力をされています。時には、地域で孤立することもあるかもしれません。しかし、分科会によるこうした交流は、お互いの活動を確認し、さらには他地域で行われている新たな活用等の手法を学ぶことによって、これまでの活動の幅を広げてくれるものと思います。

本日の総括討論では、各分科会で行われる討議のまとめとして、以下のようなテーマで、これからの各地の日本遺産の連携、そしてこれらを日本の魅力としてより高めるための課題や手法などについて討議したいと思います。

2. 総括討論（各分科会の総括報告と討議テーマ）

- ①各テーマにみる日本遺産地域の連携の可能性
分科会で見えた地域連携の新たな可能性
- ②104地域の魅力を「日本の魅力」に
地域ブランドをジャパン・ブランドに磨く道筋

日本遺産とは

1. 主旨と目的

我が国の文化財や伝統文化を通じた地域の活性化を図るためには、その歴史的経緯や、地域の風土に根ざした世代を超えて受け継がれている伝承、風習などを踏まえたストーリーの下に有形・無形の文化財をパッケージ化し、これらの活用を図る中で、情報発信や人材育成・伝承、環境整備などの取組を効果的に進めていくことが必要です。

文化庁では、地域の歴史的の魅力や特色を通じて我が国の文化・伝統を語るストーリーを「日本遺産 (Japan Heritage)」として認定し、ストーリーを語る上で不可欠な魅力ある有形・無形の様々な文化財群を総合的に活用する取組を支援します。

2. 日本遺産事業の方向性

日本遺産事業の方向性は次の3つに集約されます。

- ①地域に点在する文化財の把握とストーリーによるパッケージ化
- ②地域全体としての一体的な整備・活用
- ③国内外への積極的かつ戦略的・効果的な発信

従来の文化財行政
個々の遺産を「点」として指定・保存

甲冑	→	国宝・重要文化財
寺社・仏閣、城郭、遺跡	→	史跡・名勝・天然記念物
伝統芸能	→	無形文化財・民俗文化財

「保存」重視
→地域の魅力が十分に伝わらない



日本遺産
点在する遺産を「面」として活用・発信

「活用」重視
→パッケージ化した文化財群を一体的にPR
地域のブランド化・アイデンティティの再確認を促進

3. 認定するストーリー

日本遺産として認定するストーリーは次の4点を踏まえた内容としています。

- ①歴史的経緯や地域の風習に根ざし、世代を超えて受け継がれている伝承、風習などを踏まえたものであること。
- ②ストーリーの中核には、地域の魅力として発信する明確なテーマを設定の上、建造物や遺跡・名勝地、祭りなど、地域に根ざして継承・保存がなされている文化財にまつわるものを据えること。
- ③単に地域の歴史や文化財の価値を解説するだけのものになっていないこと。
- ④その地域や文化財に関する専門的知識を持たない人も興味や関心を持てるものとする。

日本遺産のストーリーには次の2つの種類があります。

- 「地域型」…単一の市町村内でストーリーが完結
- 「シリアル型」…複数の市町村にまたがってストーリーが展開

